

- ・追加・変更箇所は赤文字で表記。改訂日付は最新のみを記載。
- ・このメモから、ご自身の必要箇所を楽譜に転記するなど有効活用して下さい。

初版 2024/07/30

改訂 2025/01/07

【音戸の舟唄】 変更と注意事項

<曲を通じて>

【演奏方針】

- ・テンポは、練習中に確認しますが、まずは、♩ = 45 くらいとする。
- ・T1T2B1 パートが 2 つに分かれるので、担当を決めて、パート内で混乱しないように。

【曲想】

- ・舟（伝馬船）がゆっくりと近づいてきてだんだんと離れていくという感じ（音量で表現）。
9～19 小節 遠くから聞こえて（軽め） 20～41 小節 どんどん近づいて（次第に大きく）
42～49 小節 ここが最高潮 50～67 小節 どんどん遠ざかり、最後 2 小節はずっと小さくなる

<全体事項>

- ・喉に覚えさせるために、間違いをおそれずに、ガンガン歌いましょう。船を漕ぐイメージでとにかくしっかり。
- ・T1T2 38,39 小節 「でんまーせん」→「てんまーせん」に訂正

- ・T1T2B1 装飾音符（短前打音）の伴奏について

相互矛盾ともとれる記載は、試行錯誤の過程の表れなのでそのまま残しています。

今は、前短打音も正確に音取りを練習しているが本番で重要なのは、以下の 3 点。

- ①親音符（大きい音符）の音程は正確さを死守。（意外に同じ音が多いはず）
- ②メロディを凌駕する声量で勢いよく。（高音のメロディに隠れて聞こえないのはもったいない）
- ③前短打音は短く勢いをつけることが重要。親音符への入りは上か下かを意識する程度でよい。

★この伴奏の練習ステップ：①～②は必須、③は慣れればできる、せつかなので④も目指す。

- ①親音符の「音程、音符の長さ、入りのタイミング」をきちんとマスターする（これが「骨」となる）

少しずつ違うパターンなので、楽譜の場所ではなく、譜面の音を覚えることが大切。

- ①-2 装飾音符の音階が正確にとれるまでは、装飾音符を長めに音を出して練習
- ①-3 四部休符を無視してつなげて出すと、音程をとるのに効果的かも。
- ②短前打音が、親音符の「上」「下」どちらから入るのかを覚え、歯切れよく歌う。
- ③メロディとバトルするぐらいの勢いをだす。
- ④短前打音の音程を正確にとる。

①-3 をやってみると、休符なくても曲は意外に成立（幻想的な感じになる）。そうなると、休符を切るよりも、音程、特に親音符（大きい方）の音程を正確に出すことに集中する方が重要になる。すごく難しい感じがしているが、実は短前打音がない親音符のみだとすごくシンプルな和音。

T1T2 短打音との組み合わせで難しいところもあるが親音符の音取りで惑わされないように。

T1 50 小節～親音符は「A」「E」のみ。51,55,58 小節の、短打音「C」+「A」が取りにくいかも。

T2 9-19 小節 親音符はほとんど「E」、13 小節だけ「A」。

50 小節～ほとんど「E」。54 小節だけ「#F」だが、これは難しい。

B1 低い音なので f でガンガン歌って、メロディに負けないよう。

親音部が「C」ではなく、「B」になる小節があるのに注意。

高音のメロディに負けない迫力で響かせる。むしろメロディとバトルし凌駕するぐらいの強さで。

装飾音符も音階がつけられているので正確に表現する。

音がとれるまでは、装飾音符を長めにして練習して、最終形は短打音で表現する。

短前打音は勢いを強調するため、「これぞ日本民謡」というくらい食い気味で OK。

B1 上下パートとも音は取れているので、体(喉)に覚えさせるために繰り返し大きな声で歌う。

「ヨホホホ」できてきた。これなら、短打音にシフトチェンジできる（於 20250107 の練習）。

「ホ」「ヨ」は、装飾音符+親音符を「ホホ」「ヨホ」と 2 音で発音する。装飾音符を強調するため。

その際、短前打音はパパッと歯切れよく。「ヨッホー」だとヤマビコのように間延びするのでダメ。

ヨはイヨホ～ ホホはそのコダマの返しのような感じでメリハリつけてもよい。

・B2 伴奏は、「エイ(イ)ホ」とする（「エーイホ」ではない）。

<個別事項>

・T1T2B1 メロディ担当 付点 8 分音符+16 分音符のリズムは正確に（55 小節 ななうら 等）

・B1 7-8, 20-41 小節 1 パート 2 声でヨホの伴奏をする。人数少なくなるのでよりしっかり。

・B2 16 小節他 の小節は和音が違うので、「B」の音（英語表記）を正しく取ること。

※音名は英語表記、調号（楽譜の#やb）は省略、臨時記号は表記して表現。

・B1 20～41 小節は譜面通り 2 分割で進める。

・T1T2 20～28 小節 T2 はドスを利かせて迫力をだし、T1 はそれに負けずにメロディを響かせる。

・T2 20-25 小節 付点 8 分音符+16 分音符はきちんと跳ねる。特に 25 小節の、タイで伸ばした後の 16 分音符のリズム（8 分音符になりがち）。

・T1T2 31~40 小節 輪唱は同音量で**お互いに負けない迫力**で。

T2 35 小節は音域が低くなるので、テンションアップして一層しっかり声を出さないと聞こえない。

・全パート 42~45 小節 一体となって迫力で聴かせる箇所。T1 からの流れで覚えると音が取れる。短前打音を多少食い気味に強調（スフォルツァンド：その音だけ特に強く）し、親音符はすっと引くイメージ。（イヨホ～ ホホホ～ ※ヨはやりやすい、ホはやりづらい）。

T2 は「ホホ」。「ヨホ」ではない（譜面通り）。

B2 45 小節は T1 のオクターブ下の「E」「D」。「D」「C」と行きたくなる流れだが我慢。

・B2 47 小節 「G」の音は難しいので、しっかり体に入れて。

・全パート 47 小節 1 拍目を「ホーオ！」と押し出しブレスし、2 拍目からの「ヨ～」を迫力で響かせる。

・全パート 49 小節 8 分音符でピタツと音を切る。一拍半**(意外に長い)**は無音（静寂）を奏でる。もちろん指揮に従えばよいが、**指揮に頼り切っていると逆に入りが遅れるので、体で覚えて。**

・50 小節～

メロディ担当 リズムがずれると互いが打ち消しあうので、16 分音符とか 32 分音符も正確に。

B1 伴奏を厚めにして聞かせたいので、メロディ担当は 2 名くらいで十分。

メロディの 55 小節からは T1T2 と同じ高さ。54 小節まで同様オクターブ下のままでもよいが、低音はしっかり出さないと聞こえない。

T1T2B1 「ヨホ」の伴奏は 3 音に分厚くなっている。これは 60 小節からの「す～っと静かなフィナーレ」に向けて一段盛り上げることを意識。

・60~64 小節 全パート イントロとはメロディが異なっているので注意。

・63 小節～ B1B2 イントロとの違いに注意。63 小節の最後の音は「D」、64 小節が「E」。